

NAGASAKI

看護連盟だより



大村市 鉢巻山

平成23年度長崎県看護連盟スローガン

- ＊ベッドサイドから政治を変える！
- ＊長崎県の活性化に向けて看護の力を発揮しよう
- －国難に届けよう 看護の心 輝く長崎県－

特集

災害援助活動 その後の報告

目次

会長あいさつ……………	2	長崎県支部役員一覧……………	7
名誉会長あいさつ……………	3	ポリナビ会員育成研修会報告……………	8
長崎県看護連盟通常総会報告……………	4	災害援助活動報告……………	9～19
長崎県地区支部総会報告……………	5	事業推進委員のつぶやき	
参議院議員 高階恵美子あいさつ ……	6	広報委員 あとがき ……………	20



ご あ い さ つ

会 長 金 澤 きみ代

23年度長崎県看護連盟総会が終了しました。23年度は次の選挙に向けしっかりした地盤堅めをしなければいけません。22年度の反省をもとに組織の弱い部分を強化していく必要があり、具体的な対策を掲げました。

23年度の活動目標は

1、各支部の目標数を決め達成に向け実践活動をする（県は13,000票）

ちなみに高階さんの票は8630票でした。今年度は、各支部、さらにおろして各施設の数値目標を決め達成に向け支部を中心に活動いたします。

2、若手会員、無関心看護職の政治参加を促進する。

ポリナビ会員を各施設長代表者の方より推薦いただき若い看護職に向けて3回の研修を計画しています。自分たちの問題は自分たちで解決に向け活動しなければ！という認識にたち行動できる会員の育成をいたします。

3、看護職の現状を広く社会に紹介する。

4、その他必要とする問題に取り組む

を挙げ、その目標に添って具体的な活動計画に沿って実践中です。

何時までも笑顔で働き続けられる職場環境を作るためには政治の力が必要です。看護連盟は看護協会の政策実現のために活動する組織であります。看護協会と一緒に看護の質向上と職場環境の改善に向け役員一同一丸となって活動してまいりますので宜しくお願いいたします。

3月11日の東日本大震災に関しては、未曾有の災害を目のあたりにして、自然の驚異にことばも出ませんが、被災された方がたに看護職として何ができるのだろうか、連盟に出来ることは何かを考えて、長期的な関わりのなかで支援の輪を広げて実践をしていきます。

25年度の目標達成にむけ皆さんと共に頑張りましょう！！



ミヤマカラスアゲハ



ご あ い さ つ

名誉会長 山 口 ミユキ

残暑きびしき中に季節の花が移りゆく昨今、はや秋の訪れでございます。猛暑続きでの職務お疲れさまでした。

さあ一、平成23年度の事業実施に向けた活動に期待を寄せて、名誉会長として何ができるか。「石の上にも3年、重ね積み重ねて50年」の歩みを振り返り、これまでの活動を評価し、これから看護職者（後輩）に、何をどう引き継ぐのか、脳裏から離れない。

ながさき看護センターに打ち込んだ魂、「地域と共に歩む看護」、それは社会が求めた看護であり、現在、看護の拠点として、たくましい活動の実態を嬉しく思う次第であります。

- ・組織力が乏しかった頃の職場環境より「ベッドサイドから政治を変える」ことができた現在、このことは懸命に組織力強化に尽瘁した同志が共有できる喜びであり、かつ、誇りであります。
- ・看護に誇りを持って
誇りが持てる看護に専念しなければならない。看護をとおして、社会への貢献度、その評価は、県立長崎シーボルト大学看護栄養学部看護学科創設、ながさき看護センター建設、看護部長を副院長制登用等、組織で成し遂げた成果、長崎県看護界の財産であり、「安全安心」の看護が提供できる原動力であります。
- ・私にできることは、「地域と共に歩む看護」が更に根づく為に、遠近の地域集団に向けて、これまでの看護活動をとおして、「私の看護」とはと題し、私でできる看護を届けている今日であります。（出前講演）
- ・引き継ぎたいこと

備えあれば憂いなし。平成25年度の本番に向けた活動がスムーズに消化されているか否か、基礎研修が生かされた看護の現場であってこそ、ゆれない、ぶれない、「看護は一つ」のもとで、「信念こそ我が勝利」であることを大きく期待します。

会員、同志の益々のご活躍とご発展、併せてお幸せを祈念してごあいさつと致します。

東日本大震災の復興に思いを寄せて

—頑張ろう日本、輝く看護—

平成23年度 長崎県看護連盟通常総会報告

平成23年6月18日(土) ながさき看護センター

13:30

開会

物故者への黙祷

会長挨拶

名誉会長挨拶

表彰 4名出席 江頭タエ子 (故) 関 初子
本田 勝子 中村 節子

来賓祝辞

北村誠吾衆議院議員

→「自民党の運営のためにも行事・選挙の度に支え、励ましてもらっています。」



金子原二郎参議院議員

→「震災の報告会では、福島県での医療支援を大変心強く思っています。」



中村法道長崎県知事

→「みなさんが少しでも働きやすくなるよう、職務条件の見直しや、ワークライフバランスを整えるなど課題に取り組んでいきます。」



田上富久長崎市長

→「相談窓口『まちななかラウンジ』取り組み開始 ドクターとナースのネットワーク作りに介護・福祉も加え、市民に安心を届けます。」



宮本明雄諫早市長

→「健康保険諫早病院の存続について参議院議員会議にて決議されました。」



朝長則男佐世保市長

→「県北への看護教育施設建設、研修センター建設について検討中です。」



氏田美知子長崎県看護協会会長

→「看護協会の活動にも多くのご協力をしていただき感謝しています。」

14:35

議長団選出 県南地区第6支部 支部長 山添由紀子
県南地区第8支部 幹事 島村 洋子

☆会員出席数 511名 総会成立

《経過報告》

1. 平成22年度 長崎県看護連盟通常総会報告
2. 平成22年度 都道府県会長会報告
3. 平成22年度 役員会報告
4. 平成22年度 委員会報告
5. 平成23年度 日本看護連盟通常総会代議員報告

☆質疑なし 大多数の承認により可決



14:50

《審議事項》

1. 平成22年度 長崎県看護連盟活動報告(案)

平成22年度 支部活動報告(案)

2. 平成22年度 収支決算報告書(案)

3. 平成22年度 監査報告(案)

☆質疑なし 大多数の承認により可決

4. 平成23年度 長崎県看護連盟スローガン(案)

5. 規約改正(案)

6. 平成23年度 長崎県看護連盟活動計画(案)

7. 平成23年度 収支予算書(案)

☆質疑なし 大多数の承認により可決

8. 平成24年度 日本看護連盟通常総会 代議員選出について 役員一任

9. 役員選出 役員会推薦に大多数賛成

10. 平成24年度 長崎県看護連盟通常総会 開催地について 役員一任

質疑

長崎県看護連盟新規約(案)の 第2章 会員第5条にOB会員は記載されていない。しかし選挙などでは、戦力になっているため記載してほしい。

⇒看護職 OB たる「賛助会員」として対応



16:00

新役員紹介

旧役員へ謝辞

綱領宣言

自由民主党長崎県看護連盟支部活動報告

16:15

日本看護連盟歌斉唱

16:20

閉会



平成23年度地区支部総会について

県南地区支部

日 時 平成23年 7月14日(木) 18:30～20:00

参加人数 197名

来賓者 8名

感想 平成23年 7月14日18:30～20:00看護協会長崎会館 5階研修室において県南地区通常総会が開催されました。開会に先立ち、東北地震にて亡くなられた方のご冥福を祈り全員で黙祷を行いました。はじめに浦瀬妙子第1支部支部長、金澤きみ代長崎県看護連盟会長より挨拶、続いて一瀬久美子長崎県看護協会県南ブロック協議会長より祝辞があり、南相馬市での被災地で看護師、保健師の復興に向けて活動しているスタッフが心を痛めている問題など短い時間でしたが聞くことができました。来賓として下條文摩左県会議員、中山功県会議員、前田哲也県会議員、吉原孝市会議員、深堀義昭市会議員に多忙の中かけつけて頂きました。総会では、報告、協議終了後、本年度で退任される役員8人に花束が贈呈され、続いて新役員12人の紹介と、新役員を代表して植松末広第7支部支部長より今後に向けての力強いあいさつがありました。時局講演では、田上富久長崎市長より「長崎市政と看護」というテーマで新病院の将来に向けての構想が述べられ、総会が無事閉会しました。県南地区は本年度より8支部から9支部に増設され、新たな気持ちで連盟会員として次の選挙まで何をしなければならないのか一人一人考える機会となりました。

県央地区支部総会・研修会

日 時 平成23年 7月1日(金) 19:00～20:30 ながさき看護センター 3階研修室A

参加人数 148名 ＊役員含む

来賓者 3名

感想 開会にあたり、今川洋子第5支部支部長、長崎県看護連盟金澤きみ代会長、長崎県看護協会県央ブロック協議会砂川佳子会長の挨拶後、来賓の八江利春長崎県県会議員、中村和弥長崎県県会議員、福田美子諫早市市議会議員からご祝辞を頂きました。総会では、会員と役員を含めた総数148名の参加がありました。報告事項終了後、『看護ひと筋に走り続けて 一後輩に引き継ぎたい私の願い』として、山口ミユキ名誉会長に研修会をして頂きました。名誉会長の情熱と感動を交えながらの話に参加者全員、真剣に聴き入りました。看護とは何か？名誉会長の永遠のテーマである看護哲学、ご自身の体験談、闘病生活、時折、声を詰まらせながらの語りは、まさに聞くも涙・語るも涙、感無量の世界で参加者の心にスーと入ってきました。参加者全員が、“これから、何をなすべきか” 自覚することができたと思います。

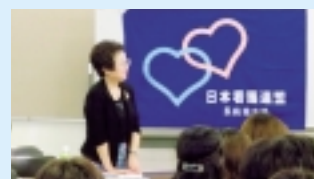
県北地区支部

日 時 7月7日(木) 18:30～20:00

参加人数 115名 (役員・リーダー含む)

来賓者 4名

感想 会員88名の参加で、平成22年度活動報告と、23年度活動計画が承認され、県北地区獲得票目標数を2600票と決定しました。次の選挙にむけて、今年は研修の年となります。実のある研修を検討していきます。その第1陣として、古川シズ子県幹事より、「私が歩いた看護の道」というテーマで40分間お話していただき、会員全員話にきき入っていました。やはり経験者のことばにはインパクトがあり、看護の歴史を教えてくださいました。古川シズ子様ありがとうございました。



離島地区 下五島支部

日 時 平成23年 7月24日(日)10:30～12:00

場 所 観光ビル ハタナカ

参加人数 54名 (来賓含)

来賓者 5名

その他 総会後山口ミユキ名誉会長講演
一看取り一筋に走り続けて一
次世代に引きつぎたい私の願い



ごあいさつ

参議院議員 高 階 恵美子



こんにちは、たかがい恵美子です。

各地から豊穡の話題が届けられる季節となりました。東日本大震災の発生した3.11はまだ寒さの凍みる頃でしたが、あれから早や6ヶ月が過ぎました。長く続く国難の時に、根気強く第一線に立って国民の命を支えてくださる皆様に、改めて感謝を申し上げます。

この間、私は新たに自民党災害対策本部事務局の医療支援班長として、医薬品・医用材料の調達や職員派遣などの直接支援、そして被災者の生活再建に不可欠な制度・財政面での公的枠組みづくりに携わらせていただいております。また参議院では予算委員会、東日本大震災復興特別委員会、厚生労働委員会、行政監視委員会などで質疑の機会をいただきました。

看護職のプロ目線で幅広くそして厳しく現状の課題を指摘し、提言した政策は必ず実現されるようにと、常に前向きな姿勢で審議に臨んでおります。

こうした議員活動の原動力は、故郷を愛し尊い命を守りぬこうと努力する仲間たちの情熱です。苦境に直面している時だからこそ、ともに生きる私たち一人一人が知恵を出し次の時代を切り拓いていかなければならないのだと強く思うのです。

活動する看護職の一人として、これからもみなさまとともに、真摯な取り組みを続けて参る所存でございますので、引き続き、よろしくご指導くださいますようお願いいたします。

H23.8.29 高階恵美子 参議院議員来崎

8月29日高階議員は長崎県を訪問、看護協会長崎会館にて約130名の会員を前に1時間、自民党議員として主に今回の東日本大震災の活動内容について講演を行われた。その中で看護職の視点で、被災地が必要としていることをいち早くキャッチし対応されるなど、势力的に活動されている状況の報告をお聴きし、私達の代表として第一線でこの国難に立ち向かわれている姿に接し、会員として誇らしい気分になった。そして自ら着けられて



いた議員バッジをはずし、会員に廻して頂いた。思いもかけず議員バッジを手にし、身近に眺めることができ私達の代表が国会で活躍しているのだという実感が湧いてきた。

又今回、被災地はもとより全国各地で看護職の底力が発揮され、世間がその活動に共感し看護職に対する関心が高まったことを成果として挙げられた。

最後に震災での活動が看護職への理解を深めたことで益々看護職に対しての処遇改善などを国に訴え続けることの重要性和、我々看護職においても自分達がおかれている看護現場をしっかりと守り、何時でも周りから支援の要請がきた時は、援助できる力を養っていて欲しいとのメッセージがあった。

多忙なスケジュールの中での来崎に感謝するとともに、今後も色々な政治状況や活動報告を多くの会員に直接伝えて頂く機会をお願いしたいと感じた。



長崎県看護連盟 支部役員一覧

地区	支 部	支部長	幹事長	幹 事			
県南地区	第1支部	浦瀬 妙子	山口みどり	松本美由喜	高濱千由紀		
	第2支部	永松 順子	神辺 みち	岡村 嘉子	田栗 寛子		
	第3支部	中村 理恵	高瀬江利子	石垣 俊子	前田 睦美		
	第4支部	下田 清子	内野かほる	長尾 鈴子	松本 光子		
	第5支部	片山 清美	高田寿美子	阿野 洋子	松山 明美		
	第6支部	坂田 幸利	深堀 立子	岩田 直美	西川眞由美		
	第7支部	植松 末広	近藤 弘美	崎山 龍子	氏原 恭子		
	第8支部	山添由紀子	藤井三千子	島村 洋子	津上 弘一		
	第9支部	本山 清子	福江まさ江	辻 ミサ子	千馬ミキヨ		
県央地区	第1支部	伊達 信子	中島 禮子	貴田 英司	浅田まつえ	菅藤 文子	川井なほこ
	第2支部	松尾 明子	松尾 愛子	本多 葵	崎山 豊子		
	第3支部	平野富美子	釜崎 弘美	村川 由紀	金崎 大輔		
	第4支部	福田 妙子	松尾由紀子	松尾 美香	吉野 千春		
	第5支部	今川 洋子	木下まさみ	石丸 紀子	高井 夕子		
	第6支部	森 良子	松山 育枝	佐竹 康子	石丸 貴敏		
県北地区	第1支部	薬王寺和子	村上 幸江	富永 信世	村井 良子		
	第2支部	福島美津子	山下とも子	浦辺佳世子	山中由貴子	坂口 広美	
	第3支部	横山紀美子	横山加代子	井元 陽子	浅田 育美		
離島地区	下五島支部	坂下 照代	矢倉 礼子	宮川 和子	赤窄かずみ	宮本紀美子	
	上五島支部	梁瀬マスエ	川端 逸子	田中 啓子	本村ひづる	松本 範子	

第1回ポリナビ会員育成研修会開催

H23年7月30日(土) 15:00~17:00

場所：長崎県看護協会 長崎会館



ねらい
「気付く」

ポリナビとは…「Politicians Navigators' Network」の略。
看護連盟若手会員を中心として
政治について学び語り合う集まりです。



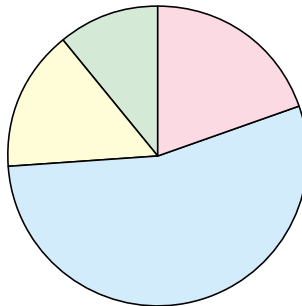
—若者が自分達の問題を模索し問題解決のためには、
政治・政策に関心を持たなければいけないことに気付く。—

若手会員のアンケート結果 (図1)

プログラム

- 15:00 開会
15:05 基調講演
「今 私たちは、何をしたらいいのか」
講師：会長 金澤きみ代
15:40 若手会員のアンケート集計報告 (図1)
15:50 シンポジウム
ねらい：この会をスタートに看護連盟ポリナビ会員として興味・関心をもつ
16:30 交流会 (グループワーク)
ねらい：グループ間での親睦を深め、他施設の看護師との仲間づくりをする
17:00 閉会

1 ポリナビ会員に推薦されたことについて

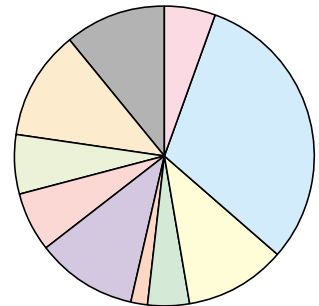


- よくわからないが興味がある
- 上司に言われたのでやってみようと思う
- 同世代の看護師と一緒に看護を考えていきたいと思う
- 男性職員が少なく、男性が誇りを持って働ける環境作りの為に参加したい

現状はこう!!
ポリナビ会員として今後の研修で、どんどん政治に関心を高めていこう。



2 ポリナビ会員としてどのような研修・学び・協議をしたいと思いますか



- 政治のことを勉強したい
- 働きやすい職場で働きたい
- 処遇改善について
- 男性職員が少なく、男性が誇りを持って働ける環境作りの為に参加したい
- 年齢の高い看護師しか職場にいないので他施設の看護師と悩みを相談したい
- 社会問題・政治・看護問題・法律・礼儀・対応姿勢など幅広い教養を身につけたい
- 同世代の看護師仲間と将来のことについて語り合い
- 病院間での情報交換の場にしたい
- 職場の看護問題を考えていきたい
- 結婚や子育ての両立できる環境を作りたい
- その他

21年度・22年度ポリナビ委員より

徐々に興味をもち理解することができた
濱口 哲平

政治の力の大きさを身をもって感じました
植松 末広

新 会員として…

男性職員の現状と問題を活動に生かしていきたい
藤澤 悟

周囲の無関心な現状、連盟活動の周知の低さを活動を通して関心を高めることができたと思う。
吉田 明子



第2回は

H23年10月22日(土)

14:00~16:00

長崎会館にて開催

ねらい
「理解を
深める」

会員の皆さんの参加をお待ちしています。

特集 災害援助活動 その後の報告

活動日付順

	氏名	施設名	派遣場所	期日	内容
1	橋口香菜美	長崎大学病院	福島県立医科 大学付属病院	3／13～ 7月	緊急被ばく重症傷病 者対応のシュミレー ション
2	張川 恭子	長崎大学病院	南相馬市（原発 20～30km屋内待 避、自主避難地 域の住居）	4／11～ 4／16	医療サービス
3	春尾 香会	長崎大学病院	福島県南相馬市 （原発20～30km 圏内）	4／18～ 4／24	巡回診療と3か所の 避難所訪問
4	竹下かおり	長崎大学病院	福島原発20～30 km圏内	4／24～ 4／28	高齢者の巡回診療、 避難所での診察
5	高浜 千秋	長崎大学病院	福島県南相馬市	5／8～ 5／15	在宅介護を受ける患 者の自宅訪問
6	平田 美己	長崎大学病院	南相馬市 福島 原発20～30km圏 内	5／16～ 5／22	医療支援、避難所4 か所の診療と在宅巡 回診療
7	春名千穂美	長崎大学病院	福島県南相馬市	5／22～ 5／29	医療チーム支援活動
8	脇浜 未紀	聖フランシスコ病院	宮城県 県南 仙塩 南三陸 気仙沼	4／6～ 4／11	ボランティア活動を 通して
9	山口 薫	日本赤十字社長崎原爆病院	宮城県 石巻市	6／6～ 6／11	心のケア要員の活動
10	岩本佐由利	日本赤十字社 長崎原爆諫早病院	宮城県 石巻市	6／12～ 6／18	救護活動 医療や地 域住民の自立に向け た支援

福島県災害支援に参加して

長崎大学病院 橋口香菜美

長崎大学病院放射線部で看護師として働きながら長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻放射線専門看護師養成コースで院生として学んでいる橋口香菜美と申します。

東日本大震災が3月11日(金)におこり、津波の映像をみているとテロップで原発の電源停止の情報が流れていました。海沿いにある原発は大丈夫なのかと不安を感じながらテレビをみていたことを覚えています。

3月13日(日)夕方に緊急招集がかかり同日に長崎を出発し、千葉にある放射線医学総合研究所へ夜中に到着しました。情報を収集しようとしたのですが福島県内の情報はほとんどない状態でした。原発から5kmのところにあったオフサイトセンターが混乱しており機能しておらず、電話回線も混乱していたため福島がどういう状況なのかを知る手段はテレビの原発情報だけでした。翌日、自衛隊のヘリが福島へ飛ぶことが決定し、そのヘリにて現地入りし、医療対策本部に行き情報収集を行いました。余震は続いており、ライフラインは電気は問題ないが電話は回線が混乱していること、断水状態であること、ガソリンが不足しており車を手配することが難しい状態であること、物資が入ってこないこと、など外の風景をみてもわからなかった地震、津波そして原発の影響の大きさを理解できた瞬間でした。原発は、私たちが福島入りした日から時間が経つにつれてどんどん状態が悪化していき、3月16日(水)に原発から傷病者発生連絡がきてヘリ要請となった時には、とうとうこの日がきてしまったという複雑な思いでした。この日から、福島県立医科大学附属病院の一室をお借りしてメンバー5人の寝泊り生活が始まりました。原発の状態によっては、長崎に帰ることはできないかもしれないという不安はありましたが、励まし合いながら今、自分たちがやるべきことは何かをそれぞれが考え、意見を出し合い行動することでチーム一丸となって活動することができました。

重症傷病者が搬送されてくることを想定して行っていた自分たちの活動のためのシミュレーションが、今では福島県立医科大学附属病院の緊急被ばくに関わるスタッフ全体で行われており、外の放射線量が一体どのくらいあるのかGM計数管やNaIシンチレーションなどで測定していたことが今でも毎日同じ場所で測定されています。3月から7月の間で計6回(50日間)福島へ行き派遣活動を行いました。急性期から慢性期になってもまだまだ課題は多い状況です。放射能・放射線に対する漠然とした不安は福島県民だけではなく日本全体に広がっています。私は、この原子力災害派遣の経験と放射線専門看護師養成コースで学んだ知識を生かして今後も放射能・放射線の正しい知識の普及活動を行っていきたいと思います。

中長期的な視点で、長崎大学から福島への看護師の災害支援活動が9月より再開します。余震も続いており、原



手術室で行われたシミュレーションの様子

発も完全安定していない状況下で長崎からの支援は必要不可欠です。今後ともご支援よろしくお願ひいたします。
最後に長崎大学病院長、看護部長をはじめ福島緊急被ばく医療派遣に協力して頂いた光学医療診療部・放射線部
看護師長、スタッフ、関係各所の皆様に心から感謝いたします。

南相馬市における活動報告

長崎大学病院 張川 恭子

私は南相馬市へ“原発から20～30kmの屋内待避・自主避難地域に居住している方々へ医療サービスを提供する”という趣旨の下、4月11日～16日までの6日間医療支援活動に参加させていただきました。

私がこの地域へ派遣された当時、福島原発での様々な事象以後、自主避難地域となっている事もあり住民はもちろん多くの医療従事者、介護サービス提供者も避難してしまい、医療・介護を含む様々な経済活動が滞ってしまっている状況でした。この地域は地震・津波の被害も受けていますが、ライフラインが維持されている世帯も比較的多いようでした。そのため不便な避難所生活よりも在宅を選び、この地域に留まっている方々も多くいらっしゃいました。しかし医療・介護サービスが滞っている状況であるため、特に災害弱者と言われる方々は震災以後ほとんど医療・介護を受ける事が出来ていませんでした。

今回、具体的には自衛隊やボランティアの方々から在宅の方の情報を得、一人一人巡回診療を行ってきました。巡回した中には、震災以後病院を受診できず常用薬の処方が必要な方、清拭など保清ケアが全く行われていない方、褥創を形成し悪化させてしまっている方などがおられました。その方々のニーズを確認し、内服処方や褥創処置など急を要する事から対応していきましました。また中には入院が必要な状態の方もおりましたが、国の方針で20～30km圏内の病院へは入院をさせてはいけない事になっており、入院調整も大変な状況でした。何とか入院先を調整しても遠方である市外の病院にしか入院できず、救急車搬送であっても入院するためには放射線スクリーニングを受けてもらわなければなりませんでした。

支援期間後半は地元の医療スタッフも、少人数ながら巡回に参加できるようになりました。スタッフの人数が増えた事によりニーズが確認できている巡回対象者へは診療、保清ケア、リハビリテーションなど手分けをし、少し時間をかけて対応していくことができるようになりました。巡回対象者は「地元スタッフのケアであればきっと継続的に受ける事が出来る」と安心感を得ていました。

いまだに続く余震に加え、今回は特に被曝の事が心配される地域での支援活動でした。そのため個人線量計を携帯しましたが、屋外へ出ても全く問題のない被曝量でした。しかし目に見えない物であるため正しい対処や理解を得る事が難しいのか、南相馬市は各支援の手も他の地域に比べ少ないようでした。医療支援に関しては長崎からの支援チーム以外に遭遇する事はありませんでした。

原発問題の収束が急がれる中、少しずつでも地元の医療・介護サービスが再開され、一日でも早く住民の皆さんが安心して暮らすことができる環境となる事を願うばかりです。

災害派遣活動報告

長崎大学病院 春尾 香会

東日本大震災発生より約一ヶ月経過した4月18日より一週間、福島県南相馬市の原発20～30km圏内で巡回診療と3ヶ所の避難所訪問を行ってきた。

巡回診療に入る前に被災地を視察し、住宅地であったはずの所は瓦礫に覆われ、高圧電線は大きく折れ曲がり津波の脅威を肌で感じ取ることができた。また、養護老人介護施設も無残な状態となり入所者の多くの方が流されてしまったとのことだったが、その施設から道を1つ隔てた所の住宅はまるで何も無かったかのようにそのままの状態に残っており、この津波の線引きには何とも言えない思いが込み上げてきた。

巡回診療を行う中で多く見られた症状は高血圧と不眠症で、原因は服薬切れと余震による不眠が殆どであった。話を聞く中で服薬切れの背景には情報不足と交通手段の断絶、屋内退避が影響しているように思えた。震災発生後よりほぼ全ての病院が休業したが、私たちが訪問した頃には少しずつ開業する病院が増えてきていたのに対し、高

高齢者であるが故の情報不足により病院が再開された事を知らなかったり、公共交通機関の復旧の遅れにより病院へ行けないなどの状況下で薬を切らしたまま生活を送っておられた。そこに余震の影響で眠ることが出来ない、日々の不安やストレスなど、目に見えない状況を窺い知ることが出来た。

巡回診療を必要とする方達の避難所へ移らない理由は、自宅が落ち着くからと言う理由の他に、認知症や体の自由がきかないことから他の人に迷惑をかけてしまうからという言葉が多く聞かれた。その方達の自宅での生活は家族や近所の方達とで助け合い、屋内退避を迫られている中、買い物へも行きにくく食事はあるもので済ませながら何とか生活しているという状況であった。障害や強い不安を抱えながら、助け合いながら頑張っておられる姿に人間の強さを感じるとともに、私たち自身も励まされた。

避難所では、ボランティアや自衛隊に混じり被災者の方も共に協力し合って生活していた。私は何人かの人に声をかけ避難所での生活や今の思いについて話を聞くことが出来た。その中で80歳女性の方が語られた「大変なのはこれから」と言う言葉が今でも私の心に強く残っている。この方は「若い頃に戦争を乗り越えようやく80まで生きたのにまたこんな目に遭って…」と話してくださった。高齢者の中には戦争を体験した方も多く、その辛い記憶を背負い生きて来られたという現実が私の頭の中にはなかった。そしてこの方との会話から東日本大震災はまだまだ過去形ではなく現在進行形であることを身にしみて感じる事が出来た。

医療支援を終え今回の活動を通し私に何か出来たのか？確かな手ごたえのようなものは全く無かった。しかし復興に対し前向きに頑張っておられる姿を目の当たりにし、私に出来る小さなことでもこれから積極的に関わっていき被災地の力になっていけたらと強く思うようになった。

福島県災害派遣を終えて

長崎大学病院 竹下かおり

長崎大学病院の災害派遣チーム第4陣の4月24日から28日まで看護職員として福島へいかせていただきました。私は看護学生時代に阪神大震災があり、関西に就職した際に災害支援に行かれた先輩看護師の話を聞いたことがありました。支援活動は大変だったけど色々な経験が出来た、発見すること多かったと話されていたことを覚えています。そこで私でも役に立つことが出来るならと思い今回の派遣を志願しました。病棟の皆様にはたくさんの負担があったと思いますが、協力とエールと勇気をいただき無事に福島での支援活動が出来ました。

私たちが行った活動は主に福島原発20から30K 圏内に在宅している高齢者の巡回診療と避難所での診察でした。まだまだ撤去されていない瓦礫や津波の影響がいたるところに残っている状態でしたが、災害発生から1ヶ月以上経過していたため遠方へ避難していた方々が徐々に自宅に戻ってこられていました。避難所の雰囲気は想像していたより落ち着いた印象をうけましたが、生活していくにはとても過酷な環境です。第4陣ということもあり1回目の巡回診療は終了していて診察より介護、ケア、リハビリ中心の巡回となりました。独居の高齢者、老々介護、施設入居が出来ず自宅待機となっている方が必要なケアを受けることが出来るようにコーディネートしていくのですが、まだまだ介護サービスが十分機能していない状態です。褥瘡処置、内服が切れてそのまま受診せず自宅に一人暮らし高齢者のケアを社会福祉協議会と市役所、公立相馬総合病院のスタッフの方々が協力してフル活動でがんばっておられました。今後重要な問題になってくる PTSD 対策も精神科医、派遣された PSW が中心となりケアが開始されていました。

被災者の方はもちろんですが、災害からほとんど無休で働いている地元スタッフの心身の疲労は計り知れないと思います。ご自身や家族も被災されている方々でしたが、懸命に活動されている皆様には本当に頭が下がりました。スタッフのみなさんは「仕事出来るから幸せです」といつもニコニコ笑顔で、長崎からの派遣があることで取り残された感じがなくなると喜んでいたのが強く印象に残っています。

原発問題は足踏み状態で福島の復興がなかなか進まず歯がゆい日々が続いています。家族を失った方々やまだ発見されていない家族を持つ方々は大変つらい思いを抱えながら頑張っておられます。被災された方が日常を取り戻すには永い時間がかかると思います。長崎と福島は遠い距離がありますがこつこつと長く協力し続けていくことが大切だと思います。

福島県南相馬市の医療支援活動に参加して

長崎大学病院 高浜 千秋

自分に何ができるのかと不安なまま到着した福島県南相馬市は、心地よい春の風で私たちを迎えてくれました。のどかな田園風景の広がる災害地とは思えない穏やかな町でした。しかし、一旦町中へ入ると、電気は消え人気もなく、走っている車は自衛隊車ばかりというゴースト化した町で、初めて体験する異様な雰囲気にとまどいを隠せませんでした。

翌日、福島県庁職員から災害にあった現場を案内され、信じがたい風景を目の当たりにしました。田畑のあちこちに崩れた家や船や車が散乱し、いまだ死体が埋まっているかもしれない瓦礫の山、かろうじて残った施設には、なまなましい津波のあとが残され、柱時計だけが空しく時を刻んでいました。そんな中でも、道路のあちこちに健気に咲いている春の花たちが私たちの心を癒してくれました。

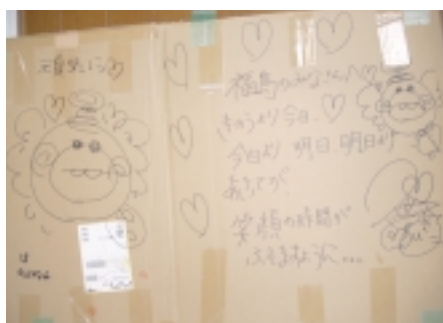
県庁職員や、南相馬市職員とのミーティングのあと、自衛隊に誘導され、南相馬市立総合病院の医療スタッフ、看護師、作業療法士を含めた6～7名で、在宅介護を受ける患者さんの自宅を訪問しました。長崎から来ましたと伝えるだけで涙を流され、喜んで見ず知らずの私たちを温かく迎えてくださいました。

災害から2カ月たち、これまでに派遣されたスタッフの頑張りのお陰もあり、在宅介護を受ける患者数は減り、1日に5～6人程度の訪問で済み、その分、時間をかけて診察やリハビリをしたり、家族のお話を聞くことができました。先の見えない問題をかかえ不安だらけの生活で、避難したくても寝たきりの老人をかかえ自宅に留まる家族や、場所が変わると不穏になる認知症の老人がいるため、避難することはできないと、緊急時避難区域で自宅での介護をつづける家族もありました。

患者宅訪問を終え、避難所へ行くと、様々な人たちが避難生活を余儀なくされており、避難所から仕事や学校に通う人、成すすべもなく避難所で過ごす人、さらに時間の経過と共に秩序の乱れなど、報道だけではわからない様々な問題が生じているのが現状でした。私たちはただ、頑張ってくださいと言うしかありませんでした。

そうした中で、自分達も被災者であり、中にはPTSDに悩まされながらも、地元病院の再開活動をしながら、私たちと医療支援活動をしてくれた地元スタッフの頑張りにには、頭が下がる思いでした。何気ない冗談に「やっと笑えるようになりました」と言ったスタッフの言葉が頭から離れません。

1週間の支援活動は、もっと何かできるのではという思いで、あっという間に終わりました。今でも地元スタッフとメールでの交流は続いており、入院体制ができるようになったにもかかわらず、スタッフ不足で変わらず忙しい日々を送っているとのこと。頑張れ！福島！一日でも早い復興を願っています。



南相馬市での医療支援に参加して

長崎大学病院 平田 美己

平成22年5月16日から22日までの6日間、福島原発から半径20～30km圏内の南相馬市での医療支援に参加した。主な活動内容は、避難所（4箇所）の診療と在宅巡回診療であった。

避難所診療は、日中学校や仕事に出掛ける人も出てきているため、前チームまでの診療時間を見直し、20時までの診療とし活動。しかし、震災から2ヶ月経ち、また継続した支援により、内科診療のニーズは減ってきているように思われた。風邪症状や消化器症状、不眠を訴える避難者の診療が主で、PTSDと思われる症状もみられ、今後はメンタルサポートの必要性を感じた。入院機能の回復はまだまだであったが、開業医の診療は再開し、また5月末で避難所診療は終了する予定のため、今後内科疾患フォローは、開業医を受診していただくように促していった。ある避難所在住の看護師は、自宅は津波の被害は免れたが、原発から20km圏内のため、妹の所にお世話になっているとのことだった。いつ帰れるかという不安、今後避難所が縮小された場合、仕事はあるのか（今まで勤務していた病院も20km圏内のため復帰は困難）という不安を涙ながらに話していた。「スタッフも被災者」ということを実感した出来事だった。

在宅巡回では、継続した訪問介入が必要な家庭への往診と、30km圏外へ避難していたが、自宅へ戻ってきた方の健康状態把握や必要な医療・福祉サービスの確認、さらに今後、避難しなくてはならなくなった場合の避難方法の確認など行なった。震災直後はかなりの数の在宅訪問を行い、安否確認と共に、緊急度が高い方は、病院への搬送も行なっていたそうだが、その状況は既に脱し、ゆっくりと被災者の話を聞く機会があった。高齢者でこの地域の施設に入所していた方は、地震後、他県へ搬送されたそうだった。しかし、新しく移った所で亡くなったという話を何度も聞き、TVではなかなか流れない事



実に、私はショックを受けた。

一緒に支援に参加した歯科チームの話では、30km圏外へ訪問診療に行くと、他県の医療チームの参加が多くあったそうだ。30km圏内では、県単位としての参加は長崎県以外になく、放射線の不安から30kmラインを境に支援量の差は大きいと言わざるを得ない。しかし、そのような状況の中でも、2ヶ月という短い時間の中で、医療サービスも少しずつ提供できるようになってきている。地元のスタッフの頑張りに心から尊敬の念を抱いた。

私達が派遣された地域は、原発問題が大きく取り上げられているが、地震の被害や、津波の被害も大きく受けた地域でもある。車が走る道のすぐそばには、大きな船が倒れ、住宅街であった場所は電柱の1本も立っていない、視界をさえぎる建物も何もない、泥の匂いで充満した区域となりTVの画面で見た以上の衝撃であった。

これらの貴重な体験も、今回、支援活動に参加させていただいたお陰です。看護部をはじめ、病院スタッフ、病棟スタッフの皆様感謝いたします。

災害支援に参加して

長崎大学病院 春名千穂美

私は、5月22日から29日の間で、長崎大学の医療チーム支援活動としては最終グループとなる第8陣として参加させて頂いた。震災からは2ヶ月余りが経過していた。

東京からは新幹線で福島県入りしたのだが、福島駅周辺は特に目立つ損壊もなく、地元の人によると、かなり人出が減っているとのことだったが、落ち着いているという印象を受けた。まず県庁で打ち合わせをした後、車で南相馬市へ向かった。山間部を通って行ったからか、特に目立った被害もなく、すれ違う車のほとんどが自衛隊の車であること以外、特に違和感は感じなかった。しかし、この時感じた静けさは、休日だったからではなく、原発の影響で計画的避難区域となり、住民の方々は避難を余儀なくされ、住宅にはほとんど人がいなかったからであった。南相馬市に入ると、閉まっている店舗も多いなか、時間を限ってではあるが、開店しているファミリーレストランやコンビニエンスストアもあり、少しほっとさせられた。

2日目の朝、海岸部へ案内され、私達は言葉を失った。田畑の広がる道を通り、両脇に木が生えている坂を上った次の瞬間、視界は一変し、目の前には何も無くなってしまった。海岸線はるか先で、もとは住宅地であったところが、家も道路も全てが無くなってしまっていた。瓦礫は大分片づけられていたが、どこから流されて、泥流を被り傾いている自動車がそのまま置いてあったり、たくさんのお年寄りの方が和やかに過ごされていたはずの老人ホームは泥流に埋まり、生活の場としての意味を失ってしまっていた。かなり片づけられていたようだが、殺伐としたものを感じずにはいられなかった。津波の威力は大きく、海岸線から離れても、道路の片側の田んぼの中には3km以上も離れた港から流されてきた船が何隻も横たわり、しかし僅か数mの道路を挟んで反対側には青々とした稲が風になびいているような異様な景色が広がっていた。

未だ時間が止まってしまっているかの様に感じられる状況であったが、医療体制は確実に変化し、進んでいるのを感じた。災害支援では、時期に応じて支援体制やその目的が変化するとは言われるが、私達の時期の支援の目標は、「地元の開業医や病院も少しずつ再開しつつあり、私達は地元の人たちをそこへ戻す援助をすること」であった。私達は、一步引いたところで、今後もそこで生活を続けていかなければならない地元の人たちのことを考え、活動するというものだった。表立って活動する方が、こちらの充実感にもつながる。実際被災地を見て、「あまり（復興に向けて）進んでいる感じがしない」と正直感じ、私達の支援の目標とするところはまだ早いのではないかという気もした。その上、南相馬市は原発の影響も大きく、物資の面でも人的な面でも十分な援助が受けられていなかった。実際地元の方々は、2ヶ月経過してもなお「先が見えない」状況におられたのだが、復興に向けて進むべく、経時的な介入も見直され、変化していていることを感じた。地元の医療スタッフは同じ被災した立場であったが、一丸となって今後の自分達の医療体制の立て直しに向けて必死で努力をされていた。この頃までには、遠方の避難所から自宅へ戻られた方々の状況を把握し、必要な介入を検討され、継続してフォローが必要な方には再開している医療機関の紹介などでつながりを作られていた。その記録も、常に形式の改善を繰り返され、後にも残せるような形に検討されていた。驚いたのは、作業療法士さんや保健師さんもチームとなって巡回されていたため、訪問時に健康状態の把握のみならず、リハビリなどの介入もされていたことである。また混乱した状況の中で、必要な患者さんを適切な医療機関につないでいく状況や、褥瘡が改善したり、ADLが改善した方々を見て、チーム医療と

いうもののあるべき形を見せて頂いた気がした。

私達の活動としては、主に避難所を回り、新しく避難所に入った方や、震災後から生活されている方々の健康状態の把握と、必要な方には再開している医療機関の紹介などを行った。相談に来て下さる方からはやはり、先の見えない不安や恐怖心が次から次へと言葉に出てくる。避難所に生活される多くの方々の中に、体の不調やつらい気持ちを言えずにいる方々がどれだけおられるかと思うと、限られた支援時間の短さと、辛さや被害の大きさを痛感せずにはいられなかった。この頃には心のケアが強く求められ、専門機関の支援もあったが、避難所などで、住民の援助に当たっているスタッフもまさしくその対象である事も痛感させられた。地元の医療スタッフもまさしく被災者であり、一般の住民の方々と同様に恐怖と悲慘な体験をしている。しかしそれを胸に秘めて現在も、これからも援助活動を続けている。気丈に、明るくふるまっておられるスタッフも、ひとたび話を始めると、胸に抱えこんだ、ぎりぎりまで張りつめた思いがあふれ出ている。

震災から5ヶ月が経ち、それなりに状況も変化してきているが、地元の人たちにとってはまだまだ先の見通しは立たないままである。再び長崎で平穏な生活に戻った自分に何が出来るのか、何をしたらよいのかわからないまま、平和な生活に甘んじてしまっている私であるが、今回作ることのできた色々な人とのつながりを今後も大切に、この土地からでも自分にできる事をしていきたいと思っている。そのような思いをより強く持つ事が出来たのも、実際に支援活動に参加させて頂いたからであり、活動そのものも、病院に守られて、安全に行なうことができた。このような機会を下さった病院、病棟のスタッフに心からの感謝の思いを改めて伝えたい。

被災地ボランティア活動を通して感じたこと

聖フランシスコ病院 看護師 脇浜 未紀

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有の大惨事を惹き起こしました。現在、死者15000人を超え、行方不明者5000人近く、震災の恐ろしさを実感しています。震災後より東北地方の方々のために私に何かできることはないだろうかと考えていたところ、日赤の方からボランティアのお話をいただき、震災発生から約1ヶ月後の4月6日～4月11日までの6日間日本赤十字社青年奉仕団として宮城県でのボランティアに参加しました。

仙台空港は津波の被害が大きく飛行機は運行しておらず、羽田空港から仙台までの往復は車での移動でした。1日目と6日目は移動日で、実質の活動期間は4日間となりました。現地に向かうまでは、「私に何が出来るのだろう」「力仕事なら足手まといになるのでは」「被災者の方へ何と声をかければいいのか」と正直なところ不安が一杯でした。現地へ行くとボランティアセンターのスタッフやセンターでボランティアをされている方々が非常に遅しく、力強さを感じました。「家を流されてやることがないからボランティアをしている」という方や、地震や津波を体験された方々の話を聴かせていただきました。【写真①】

ボランティアセンターは、宮城県合同庁舎の10階に設置されており、各地のボランティアの情報収集を行っています。千葉や奈良など各地から参加されており、方言にはお互いに苦労しましたが、ボランティア同士で話さずして共通の願いは被災者のために何かしたいという事でした。【写真②】

4月7日 宮城県社会福祉協議会の方や宮城県ボランティアセンターの方と話し合い、ボランティアの方たちの血圧測定とコミュニケーションが私たちの活動となりました【写真③】。4月8日 県南（山元・亘理・名取・岩沼）、4月9日 仙塩（塩釜・多賀城・七ヶ浜）、4月10日 南三陸、気仙沼で活動しました。現地の方々と接する中で「私たちにまで気を使ってもらってありがとう」「血圧が高くて測りたかったけど、全部流されてしまって測れなかった。よかったよ。」と感謝の言葉をいただきました。

毎日のように余震（震度3～4）が続いていましたが、寝袋に入って休もうとした4月7日の23:32、震度6強の地震を体験しました。弱い揺れを感じた途端、グラグラと強い揺れになり寝袋の中で身動きがとれないまま揺れはしばらく続き、治まった頃には周りのテーブルや椅子は散乱していました。今まで体験したことのない揺れにかなりの恐怖心を覚えました。発災時は更に強い揺れだったと聞き、地震の恐ろしさを身をもって体験しました。

【写真④】

今回のボランティア活動を通して、長崎にいては分からなかったことや被災者の方々の気持ちも聴くことができとても良い経験をさせていただいたと思っています。ただ、あの瓦礫の散乱と砂埃が舞っている景色はずっと忘れることができないと思います。

写真① 被災地の状態

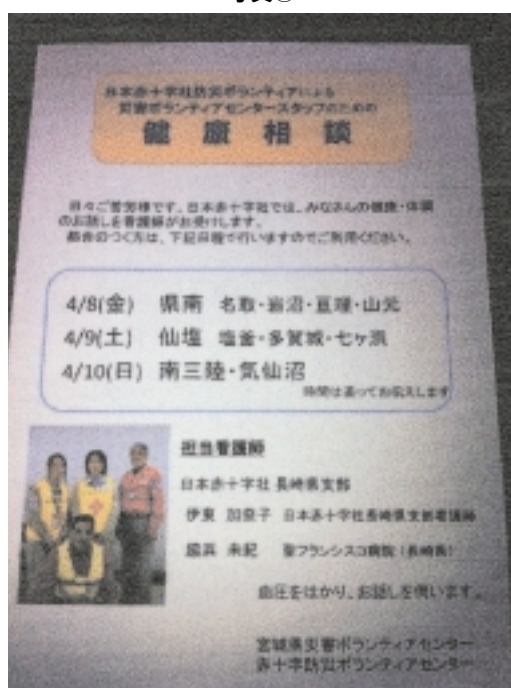


南三陸の病院前の様子



海沿いの様子

写真③



写真②



写真④



東日本大震災 災害救護「こころのケア」班活動報告

日本赤十字社長崎原爆病院 看護師 山口 薫

私は、東北大震災が起こって3ヶ月が経過した6月6日～6月11日（移動：2日間、実務：4日間）に宮城県石巻市で心のケア要員として活動した。

今回心のケア要員として、普段の業務とは少し違う分野でもあり、正直とても不安があった。しかし、同じ日本で起こっている事であり、海外からさえも救助の手が差し伸べられている状況の中、日本人として、医療者として何もできずにいる自分がふがいなかった。その矢先、派遣についての話を頂き、今できることを自分なりにしようと思った。

現地では、3ヶ月経過しても多くの被災者が避難所生活をしていた。私たちは、被災者の方々へ声を掛け、傍に寄り添い話を聞かせていただいた。話を聞き、抱えている問題を知ることです少しくとも助けになることができればと考えていた。これは関わった被災者の方の話の一部である。



「自分の命は助かった。しかし、津波から逃げる際にひき逃げをされる現場を目撃した。悪夢をみてしまう。自分は生きているがひき逃げされていた人は最後に動かなくなっていた。自分は生きているが、本当に生きているのだろうか」と語る人。

「知らず知らずに、がむしゃらに食べ物をたべてしまう。食べても食べても、お腹がいっぱいにならない」と語るが、外見上はとても痩せている人。「睡眠剤をもらっているから、飲んで眠りたいと思う。しかし寝ている間にまた地震がおきて逃げ遅れないか怖い。だから薬などは飲みたくない。ちょっとした物音でも飛び上がるぐらい恐ろしい」と語る人。

家族や友人、住み慣れた家を失った悲しみ、生死を彷徨った恐ろしさ、生きていることへの罪悪感など様々な被災者の心中を聞くことができた。

派遣される前は、私たちが直接心のケアを行うことだけが役割だと思っていたが、実際は現地での医療スタッフとの連携を図ることが多く求められていた。避難所にはさまざまな心のケアチームが派遣されていたが、連携が図れず重複して対応していた。その中で、精神科医・現地の保健師へ情報提供し継続的な心のケアを受けられるような体制を整えることも私たちの大きな役割であった。

実務4日間という短い期間では出来ることは限られていたが、あまりにも心の傷をおった人たちが多く、介入できたのはほんの一握りだと思う。目に見えるような結果は得られないが、次のチームへ情報提供しケアを継続させていくことが大切だと強く感じた。

今回赤十字職員として直接被災地で活動できたことに、感謝します。また機会があれば参加させて頂きたいと思います。

被災地の一日も早い復興を願っています。



東北大震災救護活動によせて

日本赤十字社長崎原爆諫早病院 看護師 岩本佐由利

私は6月中旬に約1週間、宮城県石巻市にて救護活動を行ってきました。チームメンバーは医師1人看護師3人主事2人の計6人でした。当院からは第3班目、日赤長崎県支部からは第9班として出動しました。私たちが活動した時期は、震災が発生して3ヶ月が経過した頃でしたので、気候的には過ごしやすい時期でした。振り返ってみると震災発生当初に活動された方々は、ライフラインが切断され、道路も倒壊・陥没し、寒いなかでの移動など、大変な中で活動されていたご苦労を想像します。

発生当初の救護活動の目的は、改めて言うまでもありませんが、人命救助及び医療救護活動支援です。震災発生後3ヶ月が経過したこの時期は、震災地域の医療や地域住民の自立に向けた支援及び救護活動撤退の時期でした。元々あった医療レベル以上にあげることがしないと注意書きがありました。その目的や私たちがとるべき役割は十分理解できました。しかし、そうはいかない現状とついていけない住民の心を感じました。地域で開業されていた病院や医師たちは、津波で流され土地も人も跡形がない状況です。受診に来られた方々に、“もうすぐこの診療活動は終了するので、かかりつけを見つけましょう。お薬もここではお渡しすることができないので、近くの薬局を見つけましょう。”このセリフを私たちは何度も言いました。多くの方が、救護活動が撤退していくことを感じており、怒る方は1人もおられませんでした。受診に来られた方々と一緒に、病院や薬局を探し決めていきました。テレビの報道では復興が進んでいる様子や、芸能人が被災地に足を運びエールを送る姿がよく見られます。しかし、現実はその甘くはありませんでした。満潮や雨の日の道路や運動場の水はけは悪く、交通手段も限られています。このような地域で自立支援を行っていくことを私たちは切なく感じていました。目的も役割も理解できますが、住民の気持ちもわかるからこそ辛く悲しい思いでの活動でもありました。

一方で、自立を支援していく時期に活動できたことで、救護活動の経過や、全体を統括する方々の心労などを思い感じることができました。震災発生当日から活動されておられる、石巻日赤病院の石井先生や自衛隊、警察に尊敬の念を抱き、私たちもできることをやろうと改めて思い、活動することができました。

私たちは、現地を後にする時に、ある渋滞の道路にはまりました。この道路は、大切な命を奪った津波が通ったと思われる道路です。多くの若い人たちは車に乗ったまま津波にのまれたと聞きました。“若い人たちは亡くなって、年寄りばかりが残った。”と、必死で生き残ったのに切ない思いを抱かざるをえないもどかしさや悔しさが伝わってきました。私たちは3月11日に発生した未曾有の東北大震災により、命の大切さ、人との繋がり大切さ、そして、人の心のありがたさを感じました。この機会を与えていただいたことに感謝するとともに、震災に遭われた方々の生活の安定・復興をお祈りいたします。

※1枚目は救護班要員、2枚目は特設の診察所、3枚目は未だ津波の影響で水が溜まっている様子、衛生面での問題も大きく「ハエ」が写真にも写っています。



総会時事業推進委員 駐車場係のつぶやき

- ・ 守衛さんより「常時居て欲しい」と要望ありました。

…4人では常時は気力・体力ともに無理です。
人数の考慮をしてほしい。

- ・ 「途中で出ます。」と言われることが多すぎな感じがしました。

駐車場はいっぱいになること、途中では退席出来ないとは知っているが、「出たいから出やすい所に」との意見の方が数名いらっしゃいました。



事前に出られたい方は有料駐車場か送迎を…と総会案内時に連絡をしてあると思います。

- ・ 入口の公道が3か所が合流し大渋滞でした。

3台ずつ順番に誘導しましたが、会員様方は明らかに不機嫌顔でした。

交通整理は男性 or 守衛さんでお願いしたいです。

広報委員会

編集 後記

広報委員の2名が交代し、新しいメンバーでの編集となりました。

連盟総会内容と、前回に引き続きその後の震災支援活動を中心とした企画としました。今後も皆様のご協力を頂きながら、活動が見える連盟だよりを目指してまいります。

広報委員 伊達木・馬場・村井・森田・松尾
相良・松崎

